



幽霊が見える!?

東日本大震災が発生してから、納棺にご縁の無かった方々とも、ご縁をいただくことが多くあります。自宅を流され、町が壊滅し、大切な家族を亡くし、みんな一人一人今でも苦しんでいる。潜在意識の中に、経験した東日本大震災がある。今でも「怖い」と話してくれる被災者の人は多い。

震災の経験者、大切な人の死を経験した人たちから「幽霊を見る」という相談がとつとも増えている。本気で悩んでいるから、私も本気で向き合わなければならないと思っている。死に携わる人たちの「幽霊」体験は、ただのオカルトでは終わらない、人間の持つ「いのち」の深さが存在していると思うから。

3月11日の、19時半頃に外で片付けをしている私のところに、子ども夢ハウスに通う女の子が「女の人の幽霊を見て、怖い」と打ち明けてくれた。言葉の最後に彼女は「怖いから助けて」と言った。もう一人の女の子は「人が居て、自分を見ている気配のある場所があって、怖い」と言った。「怖い」「助けて」はSOSだと思うので、真剣に話を聞いた。この子たちの人生の中で、津波を見たことによる潜在的なショックに、幽霊を見て怖いという現実が上乗せされてしまうのかと思うと、切なかつた。

話を聴き、私は腕を組んで目をつむり、うつむいて、しばらく悩んだ。

「そうだ、お坊さんがいる!」

子どもたちは、その怖い場所がどこなのかを、お坊さんに真剣に説明をした。二人とも、同じ場所を指していた。

お坊さんが二人、お経を二つ上げてくださった。初めて体験する焼香を、子どもたちは気持ちよく行っていた。お経を終えて、お坊さんが子どもたちにお話をしてくれました。

「東日本大震災で亡くなった人たちが、きっと最後の時まで生きていたかと思うんです。僕が思うに、魂の本体はもうちゃんと極楽浄土におられてね。生きていたかたという思い、何らかの事情があって残した思い、その『思い』だけがまだこの世に残っているのかもしれない。僕の師匠のお坊さんがね、檀家さんと恐山参りに行った時の夜、「方丈さん（お坊さんの名前）、トイレ貸して」と、三人の人が立て続けに、一人部屋で眠りに入るうとして方丈さんに話かけたんだって。

でも、方丈さん、「あれ？部屋に鍵をかけたはずだったけど?」と思った時、自分の左腕の中に、小さな子どもがいる気配がしたんだって。それで方丈さん、横になったまま、その子の頭をよよしと撫でると、気配が消えたんだって。

そして、覆返りをうったとき、部屋中にたくさんの人がいて、みんな方丈さんに向かって、頭を下げていたんだって。方丈さんは、「そうかあ、お経を上げて欲しいのかな?」と思って、お経を上げ始めたら、どのお経も途中で上げられなくなっちゃう。方丈さんは、このお経じゃないお経を上げて欲しいのかなと、色々お経を上げたんだって。最後まで上げることが出来たお経は、二つ。今日上げた二つのお経だったんだよ。この二つのお経の意味はね、

一つは、「大丈夫だよ、心配ないよ」と言う意味のお経。

二つ目はね、「その一人一人を包み込むお経。」

津波で悲しい経験をした人を力尽きて倒れたり、怒ったりはしません。事情があって気持ちを残している人たちを、お坊さんはみんな連れて帰るから。連れて帰って、極楽浄土の自分の本体と一体になってもらえらるまで、ずっとお経を上げているので、これからはもう心配ないよ。焼香をさせていただきながら、涙を流して手を合わせる子どもたちに、安心出来る空気が戻って来ていました。

「幽霊」と表現をする時、もっと深い所で安心を求めていることがあります。最も重要なことが、奥の奥にあります。子どもたちのほっとした表情は、何よりでした。

私は思います。幽霊があらったけの笑顔で現れてくれたら、誰も怖くないのにな・・・と。あらったけの笑顔で過ごしてくれる、幽霊が増えてくれることを願います。

(笹原留似子)

活動終了しました!!

ニュース

～心霊写真との付き合い方～

ある日、子どもたちから「見て欲しい」と言われた一冊の本がありました。子どもたちから手渡された本は、東日本大震災発生後の津波で壊滅した町が映る写真集でした。子どもたちは、私の目の前でどどんページをめくりました。そして、一枚のページで手が止まりました。「この写真ね、心霊写真なんだよ。」と子どもたちが言いました。東日本大震災発生後、子どもたちから多くの幽霊話を聞きました。「あそこに、手をつないで入り口を出たり入ったりする親子の幽霊がいるらしい。」「あそこで、おじいさんの幽霊が何かを探しているらしい。」「いわゆる、幽霊話です。ずいぶんたくさんのお話を皆から聞きました。今回は、心霊写真が話題になりました。「見て、笹原さん。ここにね、女の人が映ってるんだよ。ほら!」見ると、少し笑顔のように見える肩から上の女の人の顔が、まわりの生きている人の大きさと比べると倍くらい大きさに映っていました。私は子どもたちに聞きました。「この女の人、何をしていると思う?」子どもたちが答えました。「この写真、お祭りの写真でしょ。このお祭りはね、男の人しか参加出来ないお祭りなんだよ。だから、参加出来ないはずの女の人が映っているのはまず、変だよ。だけどね、きつこの女の人にはね、ただお祭りに参加しただけなんだと思うんだよ。もしかしたら、自分が死んだことに気がついていないかもしれないよ。お祭りに参加して、楽しいなあって思っているところを、たまたま写真に撮られただけだよ、きつと。」「そうかあ、そうかもしれないね。それじゃ、どうしたら良いと思う?」私が聞きました。「そっとしておいてあげたら良いと思う!」子どもたちは、静かに本を閉じました。幽霊話は被災地には確かに、たくさんあります。大人も子どもの会話にも出てきます。けれどそれも、一人一人の生活の中にある話しです。他人事のように特別視をして関わるのではなく、幽霊話も近所の人と同じような身内の感覚で関わる子供たちの姿を見て、改めてまた、大切な家族を亡くした経験の中にある、大切なことを教えてもらったのでした。

(笹原留似子)

三月が近づくととは...

3月のお墓は、供えればかりの真新しい花でいっぱいです。それを見るたびに、街のたくさんの方が亡くなったこと、大切な人たちを思っ悲しんでいるさらに多くの人のことが浮かびます。悲しみに包まれている感じがします。同時に、悲しんでばかりじゃいけない、がんばらならないという思いも、必ず見守っているから頑張ろうという亡くなった人たちの思いも感じられます。3月のお墓は、色とりどりの花々と対照的にとても静かなやりとりがなされています。

3月が近づくと、体に変調をきたします。何ともいえない倦怠感に襲われしんどくなります。今年は地震もありました。揺れがああときの感覚を呼び覚まし、どうしようもない不安感に襲われました。日常生活の中にあるヘリコプターの音がタメタという友人もいます。その音に当時の感覚が蘇るのだそうです。同じように新幹線が通過するゴーンという音。それが津波が迫ってくる音と重なるという友人もいます。命を迎える2ヶ月くらい前から、遺族はどんなに小さくとも音、匂い、言葉にとても敏感になりながら、踏ん張りながら生活します。3月11日が早く過ぎてくれないかなと思います。欲を言えば、あんなことがなかったらどんなにいいかと思ます。

この3月11日のお墓は線香の匂いを強く感じた。それだけの人がなくなったのだから、当然といえば当然なのかもしれませんが、線香の匂いは、近くに亡くなった人が来ているということらしい。どんなサインでもいい。遺された人たちに、これからもふんばれる力をあたえて欲しい。

(陸前高田市出身 靴屋のゆきのちゃん)

編集後記

いのち新聞の編集時間の会話です。被災地出身のみんなと話していた会話の中から。

笹原「心霊写真ってあるでしょ、あれって、自分の家族が写っても心霊写真って言うのかな?」

Tさん「いや、それは普通に家族写真だから、記念写真でしょ〜!」

Fさん「そうそう、記念写真!」

Tさん「写れ〜って、念じながらシャッター切るよ。」

こんな素敵な仲間と、話題は復興についてや、津波で亡くした大切な家族のことだったり、悲しみとの付き合い方だったり、そして何よりオカルトをオカルトで終わらせないと言う、一緒に時を過ごしながら、いのち新聞は作られていたのです!

「いのち新聞」へのお手紙や活動資金のご寄付ありがとうございます。

お問い合わせ先

〒024-0024 岩手県北上市中野町2丁目28-23

株式会社 笹内 「いのち」新聞編集部

☆お電話での問い合わせはご遠慮ください。ハガキ又はお手紙で受け付けています。

ご支援・ご寄付のご案内

北上信用金庫 東支店 口座番号 0103488

預金種類 普通預金 口座名称 いのち新聞 代表 笹原 留似子

ご支援いただけるスポンサーの皆さまには、活動報告を別資料として報告致しております。ハガキや封書にて住所・氏名・電話番号・メッセージなどを記入いただき、いのち新聞編集部宛に郵送ください。

2015.3.11陸前高田市

